

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.283

2016年12月

平成28年度名古屋大学公開講座を開講



目次

●ニュース

平成28年度名古屋大学公開講座を開講	3
あいちサイエンスフェスティバル2016を開催	4
松野文部科学大臣が本学を視察	5
水落文部科学副大臣が本学を視察	5
台湾の朱 振南氏から本学に書画作品が寄贈される	6
史上最年少で将棋のプロ棋士となった藤井聡太さんが松尾総長を表敬訪問	6
第1回カンボジア・日本学長会議を開催	7
情報学部及び工学部入試説明会・個別相談会を開催	7
護身術講習会を開催	8
地震防災訓練を実施	8
平成28年度日本数学コンクール表彰式を挙行	9
第5回石田賞授賞式を挙行	9
高大接続改革シンポジウムを開催	10
第54回経営協議会を開催	10

●知の未来へ

キュビズムの時代の芸術と思想・科学	11
松井 裕美（大学院文学研究科特任講師）	

●知の先端

フィールドから近代的思考と社会の先を見据える	12
佐々木 重洋（大学院文学研究科教授）	

●キャンパスクローズアップ

研究所共同館 II	14
-----------	----

●部局ニュース

植物大解剖！最先端植物研究体験を開催	16
第5回アデレード大学・フライブルク大学・名古屋大学（FAN）国際共同シンポジウムを開催	16
名古屋－延世大学間学術研究交流会2016を開催	17
公開講座「人々の『幸福』を目指した開発：ブータンの事例を中心に」を開催	17
第一回医薬系3部局交流シンポジウムを開催	18
第33回企画展「台湾 朱振南 書画の世界」を開催	18
平成29年度附属中学校入学検査説明会を開催	19
第51回日本語教育学講座公開講演会を開催	19
ICCAE 第16回オープンフォーラムを開催	19

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成28年10月16日～11月15日	20
-----------------------------------	----

●イベントカレンダー	22
------------	----

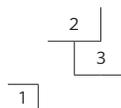
●表紙サークル紹介	23
-----------	----

●ちょっと名大史	
----------	--

名帝大附属医学専門部 一 戦時下の軍医養成 一	24
-------------------------	----

平成28年度名古屋大学公開講座を開講





- 1, 2 講義の様子
3 表彰式の様子

平成28年度名古屋大学公開講座が、8月30日(火)から11月1日(火)までの間、ES総合館ESホール、IB電子情報館大講義室及びIB015講義室において開講されました。本講座は、本学の研究成果を広く一般に紹介することを目的に毎年開講されており、今年で48回目となります。

当初、公開講座は名古屋市教育委員会との共催で、名古屋市教育館を会場として開催していました。昭和50年からは名古屋大学単独での開催となり、毎年100名以上の方に参加いただいています。

今年度は「個と集団ーネットワークの様々な様相」をテーマに全15回の講義が行われました。一見、単純に思える個と集団の関係ですが、切り口によって様々な見方ができ、その複雑性は増します。社会は個人が集まって形成していますが、その社会とはどのようなものなのでしょう。コミュニケーションやネットワークの関係はどのようなになっているのでしょうか。総合大学



である利を生かし、様々な分野で最先端の研究をしている本学教員が講師を務め、それぞれ個性ある講義を行いました。テーマはひとつですが、その幅広い観点に、講義終了後には受講者から講師に対して多数の質問が投げかけられるなど、興味の深さがうかがえました。

11月1日(火)には閉講式が行われました。宇澤社会連携推進室長のあいさつの後、平成19年度から導入している受講者への表彰制度に基づき、平成10年度以降に5年参加した3名の方に表

彰状が、10年参加した5名の方と15年参加した1名の方に表彰状と記念品が授与されました。また、受講者111名のうち講義に10回以上出席した91名の方には修了証書が授与されました。受講者からは、毎年どのようなテーマで開催されるか、楽しみにしているとの声も聞かれました。

また、公開講座開講に先立ち、7月3日(日)から9月4日(日)の毎週日曜日には、東海ラジオ放送から、ラジオ放送公開講座「名古屋大学リレーセミナー」として全10回の放送を行いました。

あいちサイエンスフェスティバル2016を開催

あいちサイエンスフェスティバル（ASF）2016が、9月24日（土）から11月3日（木・祝）までの間、愛知県全域及び岐阜県・三重県の一部地域で開催されました。あいちサイエンスフェスティバルは、この地域にサイエンスやものづくりを気軽に楽しむ文化を育むために開催しています。この地域の大学や科学館・博物館等と連携する「あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワーク」（現在26機関）の協力により、今年は約90件のイベントを実施しました。主催者である本学では、学術研究・産学官連携推進本部内の事務局企画として、18件のイベントを開催しました。

まず9月19日（月・祝）には、プレイベントとして、「集まれ！未来の科学者たち！」と題した家族向け工作・実験イベントを、トランスフォーマティブ生命分子研究所とJST-ERATO 伊丹分子ナノカーボンプロジェクトの協力を得て、イオンモール大高店において開催しました。カラーペンの色のサイエンスと、ペーパークロマトグラフィーの原理を工夫して、オリジナルアートを描くことに挑戦し、幼児から大人まで幅広い年齢層に好評な企画となりました。

会期初日の9月24日（土）には、オープニングイベントとして「ふくし×テクノロジーで未来はどうなる？」と題したシンポジウムと展示会を、ESホールにおいて開催しました。地域医療や福祉現場へのICTやロボットの導入が



ASFサイエンストークの様子



参加者からの質問に答える梶田所長（写真右）

進む中、課題を洗い出し、未来の社会について考える機会となりました。本学からは水野正明医学部附属病院教授が登壇し、医療・福祉職者と研究開発者が、当事者の不安や地域の課題を共有し、ともに進む姿勢の重要性などを話しました。

10月8日（土）には、2015年ノーベル物理学賞を受賞した梶田隆章東京大学宇宙線研究所長を迎え、「梶田隆章先生講演会&宇宙論を楽しもうDay」を、豊田講堂で開催しました。本学からも、伊藤好孝宇宙地球環境研究所教授、市来浄與素粒子宇宙起源研究機構講師、佐藤 修未来材料・システム研究所助教が登壇しました。ブース展示も行われ、多くの参加者が宇宙物理学や重力波天文学の世界の魅力を楽しみました。

10月9日（日）には、碧南海浜水族館を会場に、氏原 温環境学研究科准教授の研究室が開発した新しいゲーム「イクチオバトル」を開催しました。水族館のお気に入りの魚を観察・スケッチした後、来場者にプレゼンをし、最も多くの来場者に「その魚を見たい」と思わせた者が勝利する、という内容です。5名のプレゼンターの熱の入ったプレゼン後、来場者からは積極的に質問が飛び交い、終始盛況な様子を見せていました。

毎年恒例となっている、平日夜に栄近辺の飲食店や図書館等を会場に開催する「ASFサイエンストーク」も、週3回×5週間、計15回企画しました（うち1回は台風接近のため中止）。本学からは、飯嶋 徹素粒子宇宙起源研究機構教授、隠岐さや香経済学研究科教授、関 隆広工学研究科教授、佐藤憲昭理学研究科教授、神田英輝工学研究科助教、南 雅代宇宙地球環境研究所准教授が登壇しました。毎回、仕事帰りの方々が参加者の約半数を占め、サイエンス好きの市民で賑わいました。

以上の事務局企画イベントには、1,200名近い市民が参加しました。あいちサイエンスフェスティバル2016イベント全体では、10万人以上の参加があったと見込まれます。

松野文部科学大臣が本学を視察

松野博一文部科学大臣が、10月30日(日)、本学を訪問し、今後オープンイノベーションに力を入れるため、産学官連携にかかる取り組み及び次世代半導体窒化ガリウム(GaN)研究の状況について視察しました。

松尾総長をはじめ、國枝理事、木村理事、財満副総長、天野 浩未来材料・システム研究所教授等が、ナショナル



概要説明を受ける松野大臣

イノベーションコンプレックス (NIC) において、松野大臣を出迎えました。はじめに、総長から名古屋大学松尾イニシアティブ NU MIRAI 2020や世界トップレベルを目指す先端的研究、センター・オブ・イノベーション (COI) プログラム等の産学官連携の取り組みや現状について説明がありました。

引き続き、森川高行未来社会創造機構教授から、産学官連携の具体的な取り組みとして、名古屋 COI 拠点のモビリティ部門、モデルコミュニティ形成プロジェクトの取り組みについて説明がありました。その後、自動運転車両実験を視察し、さらに、天野教授の研究室に移動して、GaNの研究現場を視察しました。

視察の後、記者団に対し、松野大臣は「高い技術力を有する名古屋大学が産学連携を積極的に進めていることは意味がある。日本ではこういった形でのオープンイノベーションを進めていくべきか、欧米型、日本独自型なのか、大学の現場をよく見て、日本型の産学連携を考えていきたい」との考えを述べるとともに、「今後の研究開発の中心は企業が持つビッグデータの活用が重要であり、その意味でも企業と大学の連携が重要」として、産学連携の重要性を指摘しました。

水落文部科学副大臣が本学を視察

水落敏栄文部科学副大臣が、10月17日(月)、本学を視察に訪れました。

水落副大臣はまず、ナショナルイノベーションコンプレックス (NIC) を訪れ、松尾総長、國枝理事、松下理事、木村理事らが出迎えました。総長からは、あいさつのあと、本学の特色として、世界屈指の人材育成、海外 TOP 大学



NICで自動運転の説明を受ける水落副大臣

との教育プログラム、トランスフォーマティブ生命分子研究所 (ITbM) における異分野融合型の研究活動、アジアをはじめとする海外拠点形成、国家プロジェクトを推進する次世代半導体研究などについて説明を行いました。

その後、視察先を減災館に移し、同館が全国唯一の特徴としている地震を想定した建物の揺れについて、建物ごと15cmほど西側へスライドする体験をしました。館内に入った後は、福和減災連携研究センター長からの同館の取り組みや展示物の説明に対して、水落副大臣は時折質問を交えながら熱心に聞き入っていました。

再び NIC に戻り、二宮芳樹未来社会創造機構特任教授から自動運転実験車両を用いた説明があり、ドライビングシミュレーターを体験しました。

最後に、武田一哉未来社会創造機構教授から近く採択された文部科学省「産学共創プラットフォーム共同研究推進プログラム」の説明、さらに木村理事からは「組織」対「組織」の本格的な産学連携の枠組みとして新たに創設した「指定共同研究制度」について説明を行いました。全国に先駆けた本学の特色ある取り組みについて意見交換する良い機会となりました。

台湾の朱 振南氏から本学に書画作品が寄贈される

台湾を代表する著名な書画芸術家である朱 振南氏から、「青山不老・麗日東昇」の絵、「自由潤達」の書、後藤新平の言葉が書かれた掛け軸2点、さらに「自由潤達」の印が、10月14日(金)、本学に寄贈されました。総長室において行われた寄贈式には、朱氏のほかに、台湾から朱氏が名誉芸術家として講義を担当している国立台北科技大学の陳 孝行



「青山不老・麗日東昇」の解説をする朱氏

教授と揚 哲化教授、今年の3月まで全学同窓会台湾支部長であった簡 玉聰高雄大学教授も出席しました。

朱氏は「青山不老・麗日東昇」の作品証明書を見せながら、5月に台湾書画展の打ち合わせで初めて本学を訪れた時にキャンパスの地名が不老町だと気づき、常に若々しく年をとらないという“青山不老”のタイトルで絵の制作を始めたことを紹介しました。そして、自分の作品が台湾と本学の架け橋となればこれ以上の喜びはないとあいさつしました。これを受けて、松尾総長から、「青山不老・麗日東昇」の絵や本学の校訓である「自由潤達」の書など本学にピッタリの書画を寄贈いただき本当にありがたい、本学と台湾の絆が一層深まることを希望するという言葉があり、感謝状が贈呈されました。

博物館では、この秋、名古屋大学全学同窓会台湾支部設立5周年記念の企画展として、「台湾 朱振南 書画の世界―書による日台文化交流と後藤新平の再評価」が開催され、9月13日(火)から10月29日(土)までの間、朱氏の作品42点の展示もされました。

史上最年少で将棋のプロ棋士となった藤井聡太さんが松尾総長を表敬訪問

史上最年少で四段昇段を決め、プロ棋士となった教育学部附属中学校2年生の藤井聡太さんが、10月28日(金)、松尾総長を表敬訪問しました。

藤井さんは、9月3日(土)に開催された第59回奨励会三段リーグ戦で1位の成績をおさめ、史上最年少の14歳2ヶ月でプロ棋士となる四段に昇段することが決まりました。



記念撮影(左から原副校長、松田校長、藤井さん、総長、松下理事)

四段には10月1日付で昇段しています。

表敬訪問当日はあいにくの雨でしたが、藤井さんは松田教育学部附属中学校校長、原副校長、三小田博昭教諭とともに訪れました。総長応接室では、総長、松下理事が出迎えました。懇談では、藤井さんは終始緊張気味でしたが、総長らに将棋を始めたきっかけや、日々の将棋の取り組み方について語りました。勉強との両立について総長から聞かれると、苦慮している様子がうかがえました。

その後、藤井さんは将棋について、「ロジカルな部分も多いが、結論が出るときまでは読むことが出来ないので、最後は感覚である。しかし全くの勘ではなく、形勢判断等もしている」と述べました。

最後に総長から、藤井さんの今後の活躍に向けた言葉が述べられました。これからの活躍が期待されます。

第1回カンボジア・日本学長会議を開催

第1回カンボジア・日本学長会議が、10月20日(木)、21日(金)の両日、カンボジア王立プノンペン大学カンボジア日本人材開発センターにおいて開催されました。

この会議は、今後の両国の大学間交流を深めるために、カンボジアから20大学、日本から12大学が集結し、王立プノンペン大学が主催、本学が共催となり開催されたもので、



参加大学代表者による集合写真

カンボジアと日本の間で開催する初めての学長会議となりました。参加大学からの代表団のほか、カンボジアの教育機関関係者などが参加し、参加者は140名以上にのぼりました。

始めに、チュット・チャーリー王立プノンペン大学長及び松尾総長があいさつを行い、次いでユック・ゴイ カンボジア教育・青年・スポーツ省長官、永山賀久文部科学戦略官及び堀之内秀久在カンボジア日本大使が来賓祝辞を述べました。

続いて、ニット・ブンライ カンボジア教育・青年・スポーツ省高等教育副局長が「カンボジアの大学の現状と日本の大学へ期待するもの」、永山文部科学戦略官が「カンボジア及び日本の大学に向けた日本政府の施策」と題し、基調講演が行われました。

さらに、「教育・研究交流」「大学教員の質の向上」「学生のキャリア支援」の3つのテーマにおいて、参加大学からの事例紹介及びパネルディスカッションによるセッションが行われました。パネルディスカッションでは会場からの質問が相次ぐなど、会議は盛況でした。

最後にチュット・チャーリー王立プノンペン大学長から共同声明が読み上げられ、両国が今後も交流を続けることが確認されました。

情報学部及び工学部入試説明会・個別相談会を開催

名古屋大学情報学部及び工学部入試説明会・個別相談会が、10月22日(土)、シンポジオンホール及び豊田講堂アトリウムにおいて開催されました。これは、情報学部及び工学部の設置・改組が認可されたことに伴い、受験者やその保護者、高校教員等を対象として、両学部各学科の特色や魅力等を紹介し、今後の適切な進路選択をする上での一助



工学部入試説明会の様子

となることを目的としたものです。

まず、入試説明会がシンポジオンホールにおいて行われ、新体制となる工学部と新たに設置される情報学部の概要について、それぞれ、新美工学研究科長、安田情報科学研究科長及び北情報科学研究科副研究科長から説明がありました。

引き続き行われた個別相談会では、豊田講堂アトリウムに設置された各学部・学科ごとの相談ブースにおいて、相談対応の教員が、訪れた高校生等からの様々な質問や相談に対して、熱心に説明しました。

今回の説明会・個別相談会の実施に当たり、昨年度に受験生のあった愛知県、岐阜県、三重県、静岡県、長野県の高校及び近隣の大手予備校に開催の案内をし、併せて、ホームページによる周知を行ったところ、当日は、事前の参加申込者数を大きく上回る255名の参加がありました。案内をした高校のみならず、東は茨城・東京から、西は福岡と遠方からの参加者もあり、情報学部及び工学部を目指す高校生等の熱意を感じる説明会となりました。

護身術講習会を開催

護身術講習会が、10月13日(木)、減災館1階減災ホールにおいて開催されました。本学が参加するHeForSheを推進する世界の10大学の共通コミットメントとして、「より安全なキャンパスの構築」と題してキャンパス内での暴力の撲滅を掲げています。このコミットメントを推進するための取り組みとして、また学内で女子学生が不審者に襲わ



護身術の実習風景

れそうになったという事案もあり、本学構成員に身を守る意識や技術を高めてもらうために企画されました。

講習会は同日に2回開催されましたが、どちらも定員を上回る応募があり、合計で100名以上の参加がありました。当日は、副理事・男女共同参画室長である東村博子生命農学研究科教授による冒頭あいさつに引き続き、千種警察署の署員による防犯対策についての講習及び護身術の実習が行われました。防犯対策の講習では、「日本はもはや夜間一人歩きして安全な国ではない」との指摘があり、その上で夜間一人歩きする際は、防犯ブザーを手を持って歩く、スマホ操作などのながら歩きはしない、ときどき後ろを振り返るなどのアドバイスがありました。護身術講習では、腕をつかまれたり、背後から抱きつかれた場合の身の守り方について、参加者は二人一組となって実習を行いました。また、参加者には、東山キャンパスのマップに暗くて危ないと感じた箇所を印をつけてもらい、ヒヤリ地図を作成しました。

地震防災訓練を実施

名古屋大学地震防災訓練が、10月28日(金)に実施されました。本学では毎年春と秋に全学防災訓練を実施しています。授業時間中に南海トラフの巨大地震が発生したことを想定し、全学の構成員がそれぞれの役割に応じて対応を行い、全体で約1万2千名の参加がありました。

全学一斉避難訓練は、午前11時30分に緊急地震速報が放送され、2分間の安全確保行動を行った後、各建物の避難場所に教職員の誘導で避難しました。そのほかに各建物・ブロック・本部の自衛消防隊の活動、災害対策本部・災害対策部局本部の運用、安否確認も実施されました。

特に多くの学生が授業を受ける全学教育棟では、部屋ご

との避難経路を設定し、避難開始時間を階ごとにずらすなどの対策も行って安全な避難を目指しました。災害対策本部ではシナリオのない非常対応訓練を実施し、全学から無線で入ってくる報告に本部員や事務局がその場で対応し、本番さながらの緊張感のある訓練となりました。指定避難所となっている附属学校では、地域の消防団と連携して準備を進め、地域住民にも避難訓練への参加を呼び掛けたほか、当日は消防団の指導による簡易担架づくりなどに取り組みました。

大災害時にも大学の安全を確保し、教育と研究を継続するために、新たな課題に取り組みながら定期的な防災訓練を実施することとしています。



災害対策本部訓練：災害対策本部長によるまとめと指示の様子



附属学校：地域の消防団の指導による簡易担架づくり

平成28年度日本数学コンクール表彰式を挙行

平成28年度日本数学コンクール表彰式が、11月6日(日)、理学南館坂田・平田ホールにおいて挙行されました。

今回は、受賞した生徒とその保護者等、約150名が出席しました。

表彰式では、日本数学コンクール委員会委員長を務めている國枝理事、前田憲一愛知県教育委員会高等学校教育課



表彰式後のポスターセッションの様子

指導主事からあいさつがあった後、8月7日(日)に名古屋・大阪・三重・和歌山・福井の5会場で行われた第27回日本数学コンクール個人戦・団体戦、第20回日本ジュニア数学コンクール個人戦・団体戦で優秀な成績を収めた91名、及び第17回日本数学コンクール論文賞で優秀な論文を作成した7組(10名)に対し、國枝理事から賞状、メダル及び副賞が授与されました。

続いて、日本数学コンクール個人戦及び団体戦のシニア大賞、日本ジュニア数学コンクール個人戦及び団体戦のジュニア大賞、日本数学コンクール論文賞のシニア金賞を受賞した生徒から受賞の喜びと感謝の言葉が述べられました。

表彰式終了後には、問題作成に携わったコンクール実行委員の先生が、問題に対する解答とそこに辿り着く過程や考え方について、生徒と会話しながらポスターセッション形式で解説をしました。

第5回石田賞授賞式を挙行

第5回名古屋大学石田賞授賞式が、11月14日(月)、本部事務局1号館第2会議室において挙行されました。石田賞は、石田財団からのご寄附の意志に基づき、将来の発展が期待できる優れた研究能力を有する若手研究者を顕彰し、その研究意欲を高め、研究の発展を支援する目的で創設されました。今年度は第5回として、人文・社会科学、自然



記念撮影(総長、受賞者、審査委員)

科学の両分野に分け、東海3県(愛知、岐阜、三重)内の研究機関で研究する若手研究者を対象として募集を行いました。慎重な審査の結果、人文・社会科学分野から松井裕美文学研究科特任講師、自然科学分野から須田理行自然科学研究機構分子科学研究所助教を顕彰することを決定しました。

授賞式には松尾総長、國枝理事、松下理事、木村理事及び審査委員が出席し、國枝理事から受賞者の発表及び研究テーマについての審査講評があった後、総長から「今後も石田賞の名を高めるような研究を行い、さらに大きく成長してほしい」とのあいさつがありました。

また、受賞者からは「名誉ある賞をいただけたことは今後の励みになる」、「石田賞の名に恥じない研究を行いたい」との謝辞がありました。

その後、総長応接室において、受賞者及び授賞式出席者との懇談が行われ、研究活動や今後の発展性についての意見交換が行われました。

高大接続改革シンポジウムを開催

高大接続改革シンポジウム「高校・大学・企業がともに考える教育改革と入試改革：『高大社接続』の可能性を探る」が、11月12日(土)、メルパルク名古屋において開催されました。同シンポジウムは国立大学協会の共催で、「国立大学フェスタ2016」(国立大学協会主催)の一環として行われ、高等学校関係者、大学関係者、企業関係者をはじめ全国各



趣旨説明をする木俣副総長

地から約200名が参加しました。

シンポジウムは、石井総長補佐の司会のもと、松尾総長の開会あいさつで始まり、来賓を代表して濱口太久未文部科学省高等教育局主任大学改革官からあいさつがありました。

第1部では、コーディネーターの木俣副総長から趣旨説明があった後「これからの時代に求められる資質・能力について」というテーマで表 利彦日東電工株式会社専務執行役員、川村昌宏愛知県立時習館高等学校校長及び松下理事よりそれぞれの立場からの話題提供がありました。

第2部のパネルディスカッションには、第1部の話題提供者に加え、濱口主任大学改革官、内匠 逸名古屋工業大学理事・副学長、江馬 諭岐阜大学理事・副学長、山本俊彦三重大学理事・副学長が参加しました。木俣副総長及び戸田山総長補佐がコーディネーターを務め、「大学と社会のつながり」及び「個別選抜における『学力の3要素』の多面的・総合的評価」について活発な意見交換が行われ、シンポジウムは盛況のうちに終了しました。

第54回経営協議会を開催

第54回経営協議会が、10月25日(火)、ナショナルインノベーションコンプレックス3階大会議室において開催されました。

会議では、松尾総長からあいさつの後、中期目標・中期計画の変更、人事関係諸制度の見直し、平成28年度業務達成基準適用事業について総長、各担当理事及び副総長から



会議の様子

説明が行われ、審議の結果、了承されました。

次いで、平成27年度に係る業務の実績に関する評価結果、平成29年度教育研究組織の設置等、平成29年度概算要求、名古屋大学財務レポート2016、名古屋大学基金、第12回ホームカミングデイ実施報告について報告が行われました。

また、懇談として、指定国立大学法人制度等について意見交換がなされ、外部委員の方々から貴重なご意見が寄せられました。

キュビズムの時代の芸術と思想・科学

松井 裕美
大学院文学研究科特任講師



ロベール・ドロローネー《パリの街》1912年。
パリ、ポンピドゥーセンター（国立近代美術館）

作品を読み解くことです。たとえばキュビズムの画家ロベール・ドロローネーが1912年に完成させた油彩作品《パリの街》における、幾何学的に分析された身体表現は、ドイツの著名な画家アルブレヒト・デューラーが若い絵描きたちに提案した、対象を幾何学化する素描方法を適用しているように見えます。しかしよく見てみると、単にモデルの形態を正確に捉えるだけでなく、解剖学的な特徴や影のニュアンスとは関係のない線や色が混ざっていて、同じように幾何学化された衣の襞、背景などと複雑な呼応関係を生み出していることがわかります。

このように、主題としてはさほど複雑ではないこうしたキュビズム様式の絵画も、どのような手続きを経てこのような幾何学的な形態に至ったのかを把握するためには、個々の芸術家の素描や手記を検討しながら、そのイメージの生成のプロセスを追っていく必要があります。こうしたことの積み重ねの中で、科学や思想が同時代の芸術運動に及ぼした影響をよりよく理解することが、現在の研究の目標です。

わたしが研究の対象としているキュビズムという芸術運動は、第一次世界大戦前のパリで生まれました。対象をラディカルに幾何学化するこの運動は、美術史においては抽象的な表現へと向かう端緒をなすものとして大変重要な位置を占めています。またキュビズムは、様々な人や知識、物の交差する場で育まれた運動であるだけに、美術史のみならず、当時の科学や技術、政治社会、思想の歴史とも密接に結びついています。たとえば非ユークリッド幾何学やレントゲン写真、X線といった科学の分野での発見は、キュビズムの芸術家と彼らを取り巻く文学者たちに、眼に見えない現実というものについて考察する契機を与えました。また植民地からの物流のなかにはアフリカやオセアニアの部族芸術が含まれており、西洋の伝統的な芸術とは異なる造形言語の発見を芸術家たちに促しました。さらに女性の新しい理想美の探求、スポーツによる肉体美の追求、エッフェル塔の称賛、ベルクソンの大流行など、とにかくあらゆる分野における最先端のヴィジョンを取り入れようとした若者たちの芸術だったのです。

しかしこの新しいもの好きの若者たちは、同時に自らの芸術が伝統の系列に加わるということ強く望んでいました。古代彫刻への関心、古い絵画の手引書への関心、ゴシック美術への関心、そうしたものすべてが、彼らの芸術を支えるもうひとつの原動力になっていました。また彼らは、美術作品と執筆活動を通して、彼らの時代の芸術が、過去の偉大な様式に匹敵する運動であることを繰り返し主張します。

わたしの研究課題は、このような複雑な経緯のなかで、手探りで自らの時代を築き上げようとした芸術家たちの知識と思想の射程を明らかにしながら、難解だと考えられる傾向にある彼らの

フィールドから近代的思考と社会の先を見据える

佐々木 重洋 大学院文学研究科教授

愛知、長野、静岡の県境に広がる中山間地域は、伝統文化や民俗の宝庫として知られています。なかでも、「花祭」をはじめとする霜月神楽系の祭礼は有名ですが、今日、これらは例外なく伝承地における過疎化、高齢化と継承者人口の減少によって存続上の問題を抱えています。一方、同地域は小規模集落の増加や地域コミュニティの活力低下、地域経済の低迷が問題視され、農政的な農山漁村振興や都市農村共生・対流の観点からも注目されています。じつは、こうした問題の複合的出現は、全国の中山間地域におおむね共通してみられます。地域間格差の問題は、グローバリズムがもたらした負の影響のひとつです。

しかし、中山間地域は食料や木材の供給、災害

の防止と水源の涵養、自然環境・生物多様性の保全、地球温暖化防止などさまざまな点で公益的機能を有しています。自然環境の点からみても、その保全は都市住民にとっても他人事ではあり得ません。とくに、わが国は国土の70%程度を山林が占めています。一方、ユネスコの主張を待つまでもなく、文化的多様性の保全は、異文化間の相互尊重と対話の起点として、とくにグローバリズムが世界を席卷しつつある今こそ大きな意味を持ちます。

ところが従来、例えば民俗研究と農山漁村振興は異なる研究分野の問題として別個に扱われがちで、行政上の管轄も別々であるため、複合的に出現している諸問題を同一の地平でとらえること



写真1 山の中腹に家屋が建つ（長野県下伊那郡天龍村坂部）



写真2 愛知県北設楽郡豊根村の一集落。集落によっては廃屋も目立つ。



写真3 花祭で舞庭（まいど＝祭場）にやって来る鬼（愛知県北設楽郡東栄町小林区）。ここでは鬼は、よくあるような「邪悪な鬼」ではなく、山の精霊、カミである。祭礼全体に神々との共生、ひいては自然との共生の思想が流れており、現代思想の面からも注目に値する。

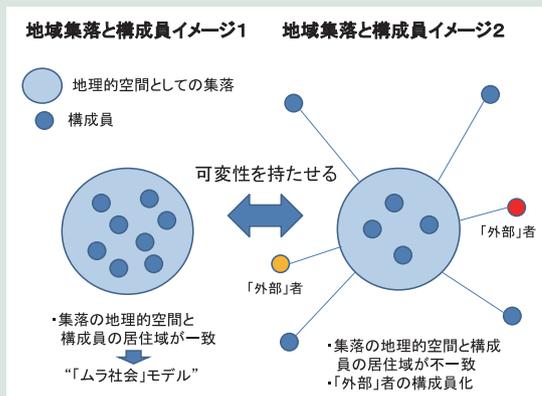


写真4 愛知、長野、静岡の中山間地域では、旧暦の霜月に湯を立てて神々に献じる祭礼が広く伝わっている。湯立ての手順、技法については、地域ごとにかかなりの多様性がある（写真は長野県飯田市上村の遠山霜月祭）。ただ、いずれの場合でも湯は水＋火、つまり生命力の根源としての意味を持つと考えられる。

も、その生成と進展のメカニズムを根本的に解明し、有効な対策を講じることもできていません。そこで私は、この問題意識を念頭に置き、まず伝統文化や民俗が地域にとって有する多面的な意義と潜在性をとらえなおそうと調査研究を継続しています。

今日、伝統文化というと、どこか実利とは乖離した存在としてとらえられる傾向があるようにみえます。しかし、人類社会においてそれは比較的最近の発想です。文化は政治経済や自然環境などと連続しています。そこから文化だけを切り離し、その保全を訴えても無意味です。地球規模における自然環境の保全と自然資源の持続的利用を念頭に置きつつ、都市／村落間、そして地域間格差を是正し、中山間地域に若年層が定着するとともに、老若男女が安心して居住できるような生活インフラと選択肢（ケイパビリティ）を再整備し、その人びとが伝統文化を継承するのが理想的であることは論を待ちません。ただ、「選択と集中」などという言葉に代表されるような功利主義や新自由主義が幅を効かせ、何かと効率が求められる今日では、それをただちに実現することが容易ではないのも確かです。

そこで、地域コミュニティとそのマンパワーの概念を拡大することも検討に値すると考えています。地域を、地理的空間に必ずしも限定させず、さまざまな立場の人が、それぞれの立場で地域を支える方途を考えるのです。幸い、インターネットとSNS、道路整備と自動車の個人普及など、現代の科学技術はそれを可能にするインフラを整えつつあります。これらを有効に活用すれば、地域コミュニティのあり方も変わり得ます。極めて単純化した概念図でみると、イメージ2を従来の



図

イメージ1と可変的に併用することです（別図）。実際、例えば奥三河の花祭の事例では、祭礼を運営している人員の半数以上が集落外居住者であるというようなことは、すでに珍しくなくなっています。地域固有の伝統や習慣をただ形式的に受け継ぐのではなく、その主旨を継承しつつ、それを現代的文脈にいかに関接し得るかという点が重要だと私は考えています。

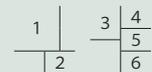
近代社会は、自然と文化を対置させてとらえる傾向がありました。しかし今、文化的多様性の保全と自然環境の保全は表裏一体の課題として現出しています。私たちは、次の社会のあり方とその思想的裏づけを模索しなければなりません。人権、民主主義、科学技術、市場経済などの近代の恩恵を個々に突出させることなく、適切に使いこなす知が必要です。そのためには、グローバリズムに安易に追従するのではなく、地域やローカル性に立脚した発想が重要と信じて、フィールドで思考と実践を続けています。

1997年京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。名古屋大学文学研究科准教授を経て2015年より現職。専門は文化人類学。1991年以降、日本や熱帯アフリカなどでフィールドワークに従事。カメルーンのエジャガム社会では年齢組と仮面結社のメンバーである。2002年に名古屋大学に来てからは、奥三河に通い続けている。昔、「スクールウォーズ」の時代に京都市内の高校でラグビーをやっていたこともあってか、今でもたまに大学教員らしくらぬ(?)言動で周囲を慌てさせることがある。

ささき しげひろ



51. 研究所共同館Ⅱ



- 1 建物外観
- 2 リサーチパーク中央広場
- 3 エントランス前の外廊下
- 4 通り抜けできる
エントランスロビー
- 5 井戸端会議の場
- 6 東山公園を望む
打合せコーナー

■グリーンイノベーションの研究拠点

2016年春に竣工した名古屋大学研究所共同館Ⅱは、東山キャンパス東端の研究所地区「リサーチパーク」再開発の中核施設として建設されました。分野横断的な複合研究拠点であり、産学連携・地域連携・社会貢献を促進し、世界最高水準のグリーンイノベーションを継続して創出するための施設です。幾つかの組織を統合して新しく設置された「未来材料・システム研究所」や「宇宙地球環境研究所」が研究活動を行っています。

■名古屋大学リサーチパークの中核

本建物は、グリーンイノベーションの研究拠点にふさわしい、「環境親和性の高い建築」を目指しました。これは、省エネルギー化など適切な地球環境配慮の取り組みとともに、隣接する研究所共同館Ⅰおよび広場を含めたエリア全体での、調和のとれたデザインと一体的な環境形成に配慮するものです。また、低層の実験棟、中層の研究棟の一体型施設として、その接続部分に研究者の交



流空間を集約すると同時に、分棟である事を生かした建築構造および設備の合理的設計が行われました。

■建築・環境デザインの工夫

・リサーチパークの発展を見据え、今後開放が予定される東側入構ゲートとキャンパス中央部を結ぶメインストリートを確保し、既存樹木を活かした広場を設けることで、キャンパスらしい



広がりのある憩いの空間を創出しました。この広場がリサーチパークの中心となります（写真1, 2）。

- ・研究所共同館Ⅰとは、機材や資料の移動に考慮して底のある外廊下で接続され、今後建設されるクリーンルーム実験棟とは通り抜けのエントランスロビーと屋外のピロティで接続される構成となっています（写真3, 4）。
- ・各フロアに議論や交流のための空間を集約的に作り、地域産木材でできたカウンターテーブルや全面ホワイトボード壁を使った井戸端会議の場、さらには東山公園の豊かな緑地とタワーが見える打合せコーナーが作られました。この空間は、建物北側に飛び出したつくりとなっており、中央の広場に賑わいの雰囲気をもたらしています（写真1, 5, 6）。
- ・外壁には、研究所共同館Ⅰや創薬科学研究館など他の建物で多く使われるベージュ系ホワイトの3色をランダムに配置したルーバーが設置され、名大らしさとともにオリジナリティのある景観をつくり、設備機器の目隠しと直射光遮蔽の役割を担っています（写真1）。
- ・大空間が必要で振動を嫌う実験室を低層棟に、小部屋の研究室・実験室を高層棟にし、建築構造の合理性を高めました。また、研究所共同館Ⅰの空調機械の持つ余力が、本建物の共用空間

の空調に活かされるなど、研究所共同館Ⅰのエネルギーマネジメントシステムを活用した省エネルギー化を図っているほか、太陽光発電設備により災害時にも一部の部屋に電力を供給可能です。

今後も、世界最先端の研究と自由闊達な学びの場に相応しい環境づくりを、進めていきたいと考えています。

（工学研究科・工学部施設整備推進室
准教授 太幡英亮）

植物大解剖！最先端植物研究体験を開催

●トランスフォーマティブ生命分子研究所、大学院理学研究科

トランスフォーマティブ生命分子研究所、大学院理学研究科は、11月12日(土)、理学南館1階において、体験型アウトリーチ「植物大解剖！最先端植物研究体験」を開催しました。これは、昨年度発足した文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究「植物の成長可塑性を支える環境認識と記憶の自律分散型統御システム（環境記憶統合）」の



概要説明の様子

活動の一環として行われたもので、高校生から社会人を主な対象として32名の参加がありました。

体験では、まず参加者全員で、生命の設計図であり、遺伝子の実体であるDNAをタマネギから単離する実験を行い、染色によって単離したDNAの観察を行いました。その後、最先端植物研究体験として、(1)植物の環境応答のモデル細胞である気孔の光学顕微鏡や赤外線サーモグラフィによる観察、(2)植物に感染する病原菌の光学顕微鏡による観察と植物の感染応答の観察、(3)植物に含まれる二次代謝物（トウガラシのカプサイシンなど）の質量分析器による測定、(4)蛍光タンパク質を発現させた植物や微生物の蛍光顕微鏡による観察を行いました。

アンケートの結果、「最先端の研究内容や研究機器を知ることができ、とてもいい経験となった」や「もっとこういう機会を増やしてほしい」といったコメントが多くあったため、来年度以降も引き続き、このような体験型アウトリーチの計画が期待されます。

第5回アデレード大学・フライブルク大学・名古屋大学(FAN)国際共同シンポジウムを開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、10月17日(月)、18日(火)の両日、オーストラリアのアデレード大学において、第5回アデレード大学・フライブルク大学・名古屋大学国際共同シンポジウム及び合同学術協力会議を開催しました。同シンポジウム及び合同学術協力会議は、医学分野における3大学間の共同教育プログラム、共同研究のさらなる発展を目的



研究発表をする高橋研究科長

として、毎年各大学持ち回りで開催されているものです。

シンポジウムでは、まずアンドリュー・ザネッティーノアデレード大学教授のあいさつの後、高橋医学系研究科長をはじめとする合計13名の研究者が、腫瘍学、神経学、循環器学、老年学、公衆衛生学の各分野で研究発表を行いました。発表後は大学の枠を越えて活発な議論が行われ、今後の共同研究の可能性を探る上でも素晴らしい情報交換の場となりました。翌日には、6名の研究者による研究発表や、3大学関係者による合同学術協力会議も開催され、今後の学術交流における方向性や課題について議論が行われました。

また、昨年から3大学の学生による発表も行っており、本学からは2名の学生が参加しました。学生はアデレード大学の研究室に2週間滞在し、海外での研究活動を体験しました。

今回で5回目ということもあり、打ち解けた雰囲気の中、教員はもちろん、学生レベルにおいても深い信頼関係が築かれました。今後の3大学間における研究交流の更なる発展が期待されます。

名古屋－延世大学間学術研究交流会2016を開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、11月2日(水)から4日(金)までの3日間、大幸キャンパスにおいて、国際交流の一環として「名古屋－延世大学間学術研究交流会2016」を開催しました。同交流会は7年前から延世大学と大学院レベルでの学術研究交流を目指して始まり、第1回開催以来、毎年両大学で交互に開催しています。韓国の延世大学から教員6



開会式典における記念撮影

名・院生18名の合計24名、第三国からの5名(タイ/チュラロンコン大学・マヒドール大学から各2名、ミャンマー留学生1名)、学内の院生・教員など全体で200名超の参加者があり、活発な意見交換が行われました。

学術研究交流会は3日(木・祝)に開催され、最初に開会式典で、小嶋保健学統括専攻長、そして延世大学保健学部長であるチュン・ビュン ジョ教授からあいさつ及び大学紹介がありました。その後、看護学、放射線技術学、検査技術学、理学療法学、作業療法学の5分科会に分かれて合計43題の研究発表が行われ、夜には専攻別の交流会が開催されました。2日(水)には歓迎会、4日(金)は個別交流が行われました。さらに延世大学の院生のうち2名は6日(日)まで、13名は8日(火)まで本学に滞在し、各専攻での研究室訪問により研究交流を一層深めました。なお別途、本学の院生11名も延世大学の研究室を訪問する予定です。

今回が7回目の交流会で両大学間の友好関係も深まり、院生の国際交流への意欲向上とともに、緊密な人材交流が図られてきています。同交流は、平成23年度よりJASSOの支援(今年度は派遣のみ)、今年度の受入れはJSTのさくらサイエンスプランの支援を受けて実施しています。

公開講座「人々の『幸福』を目指した開発：ブータンの事例を中心に」を開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、10月6日(木)、13日(木)、20日(木)、27日(木)の4日間、同研究科オーデトリウムにおいて、「人々の『幸福』を目指した開発：ブータンの事例を中心に」と題して公開講座を開催しました。

開発の目標は経済開発中心から人々の幸福を考慮したものへと変わりつつあります。同講座の前半では、上田晶子



今枝氏による講演の様子

同研究科准教授から「政策としての幸福：ブータンの事例から」と題して、京都大学こころの未来研究センターの今枝由郎氏からは「幸福大国ブータン：日本がそこから学べるものは？」と題して、幸福度を開発政策の中心に据えるブータンの取り組みの現状やそうした政策が生まれた社会的・文化的な背景等が紹介されました。後半では、藤川清史同研究科教授から「幸福度を測る」と題して、上田准教授からは「関係性を軸に生きると？」と題して、現在考案されている幸福度の測り方や我々が幸福を感じるためのヒント等が紹介されました。

50名という多くの参加がありましたが、年齢層は学生から定年退職された方まで幅広く、世代を問わず「幸福」への関心が高いことがうかがえました。特にブータン研究で著名な今枝氏の講演では、予定時間を大幅に超えて質疑応答が行われるなど、参加者の熱心な姿勢が見られました。

第一回医薬系3部局交流シンポジウムを開催

●大学院創薬科学研究科

大学院創薬科学研究科は、大学院医学系研究科、環境医学研究所と合同で、11月7日(月)、ES総合館ESホールにおいて、「第一回医薬系3部局交流シンポジウム～生物学から創薬への展開～」を開催しました。それぞれの部局から、教員、研究員、大学院生、学部生など約130名が参加しました。



講演者を交えた集合写真

シンポジウムでは、辰川英樹創薬科学研究科助教、天野剛志創薬科学研究科特任助教、溝口博之環境医学研究所講師、佐橋健太郎医学部附属病院病院助教及び須賀英隆医学部附属病院助教が最新の研究成果発表を行いました。また、永森收志大阪大学大学院医学系研究科准教授により「アミノ酸トランスポーターを標的とした創薬研究」の演題で招待講演が行われました。部局間の交流を深めるために、研究室紹介を目的としたポスターセッションも併せて実施され、活発な議論が展開されました。同シンポジウムは本学の医薬系3部局が一堂に会し、情報交換と人的交流を行う初めての機会でもあります。若手研究者の積極的な交流が特に印象的で、新たな共同研究の萌芽も数多く散見されました。

大学院創薬科学研究科は平成24年度に「多分野融合教育による次世代を先導する創薬基盤研究者」の養成を目指し設置されました。同シンポジウムを契機に医薬系3部局の学際的な連携が強化され、本学における創薬科学・医学の研究と教育の更なる発展が期待されます。懇親会にてあいさつをした人見創薬科学研究科長から、同シンポジウムを今後も継続的に開催することが述べられました。

第33回企画展「台湾 朱振南 書画の世界」を開催

●博物館

博物館は、9月13日(火)から10月29日(土)までの間、「台湾 朱振南 書画の世界－書による日台文化交流と後藤新平の再評価」を開催しました。朱 振南氏は、東洋の水墨画と西洋の水彩画を融合した新しい画風で世界的に著名な書画芸術家で、会場には42点の作品が展示されました。会期中に約4,200名の見学者が訪れ、朱氏のほのぼのとして“心

が癒される”書画の世界を楽しみました。

この企画展では、明治10年代に愛知医学校の校長を務め、後年、台湾総督府民政長官として活躍した、本学と台湾を結ぶキーパーソンである後藤新平のコーナーが併設され、医師・教育者としての後藤にスポットを当てた展示が同時開催されました。同コーナーでは、台湾で纏足(てんそく)禁止を周知させる為に、健常者の足の骨と纏足の骨を並べた絵に、能書家の後藤が揮毫した「唯是自然 乃能成體」(自然のままが一番いい)という見事な書が最も注目を浴びました。会期中には、高橋 昭名誉教授による「後藤新平と黎明期の名古屋大学」、安達柏亭氏による「書聖小野道風が遺したもの」、足立雲峰氏による「書に親しむ」、足立 守 PhD 登龍門推進室特任教授による「硯の地球科学」の4回の特別講演会が開催されました。さらに、10月15日(土)のホームカミングデーでは、“書による日台文化交流”イベントとして、約60名の市民が見守る中、朱氏、安達氏及び足立雲峰氏の3人が書画作品の制作を行いました。見学者は、筆の運び、墨継ぎ、墨のぼかし方、落款の位置など、作品ができていくプロセスを目の前で見ることができ、書画の奥深さと面白さを体感していました。



後藤新平コーナーの様子(中央が後藤の唯是自然 乃能成體)

平成29年度附属中学校入学検査説明会を開催

●教育学部附属中・高等学校



SGH 研究開発の紹介

教育学部附属中・高等学校は、10月9日(日)、豊田講堂において、平成29年度附属中学校入学検査説明会を開催しました。附属学校は併設型中高一貫校のため、附属中学校へ入学すると附属高校へ全員が進学します。高校からも1学級(40名)を募集しますが、「国立」「中高一貫」「大学の敷地内にある」「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)やスーパーグローバルハイスクール(SGH)など先進的な取り組み」などの魅力で、附属学校へは中学校から入学を希望する方が大変多いです。そのため、ここ数年は収容人数の多い豊田講堂で、午前10時及び午後2時からの2回に分けて開催しています。

今年度は三連休の中日にもかかわらず例年通りの大盛況でした。個別のブースは今年度から小学生にもわかりやすいように「教務部」は「中学校の学習」、「指導部」は「学校のきまり」などと表記を工夫しました。

第51回日本語教育学講座公開講演会を開催

●大学院国際言語文化研究科



講演する西阪教授

大学院国際言語文化研究科は、11月7日(月)、東山キャンパスにおいて、第51回日本語教育学講座公開講演会を開催しました。西阪 仰千葉大学文学部教授を講演者として招き、「心配と安心の道德性-感情・知識・検査-」と題する講演を行いました。西阪教授は日本の会話分析(社会学の一分野)の第一人者であり、当日は関東・関西・北陸からも出席者があるなど、講演会は大変な盛況でした。講演では、東日本大震災での原発事故後に福島で行われた「内部被ばく検査」の結果を医師が受検者に報告する場面に焦点を当て、結果報告のやりとりを録音したものを会話分析の手法を用いて分析し、その中で受検者の「心配」や「安心」といった感情がどのようにして「道徳的な対象物」としてその場の参加者に志向されているかを詳細な分析で明らかにしました。講演会後の質疑の時間には、講演者と聴衆の間で活発な議論が行われました。

ICCAE 第16回オープンフォーラムを開催

●農学国際教育協力研究センター



講師を囲んだグループディスカッションの様子

農学国際教育協力研究センター(ICCAE)は、10月29日(土)、野依記念学術交流館において、第16回オープンセミナー「農林水産学分野における国際キャリアアップを目指して-学生が自ら取り組むキャリアパスへのアプローチ-」を開催しました。過去2回のフォーラムでは、教員を主な対象に、教育機関等が組織的に取り組むべき国際教育プログラムなどについて議論しました。そこで本年は、主な対象を学生とし、株田文博政策研究大学院大学教授、田中 理 JICA 農村開発部企画役、加藤洋一郎国際稲研究所作物環境科学部国際農業研究員、北尾理恵株式会社三祐コンサルタント海外事業本部技術第1部技術課副参事の講演、そして講師を囲んだグループディスカッションを行い、グローバル人材のための要件やキャリアアップのスタートラインに立つ上で備えておくべきスキルなどについて情報を共有し、学生が自ら取り組むべき具体的なキャリアパスへのアプローチについて議論しました。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
1 博物館で開催中の企画展に出品している台湾の書家朱振南氏が書画4点を本学に寄贈し、松尾総長から感謝状を受け取った	10.16 (日)	中日 (朝刊)
2 科学創作コンクール 益川名誉館長特別賞：名古屋市伊勢山中学校1年生石川嵐丸さん、石川力丸さん	10.16 (日)	中日 (朝刊)
3 本学で女性の活躍推進を誓う「HeForShe」モニュメントの除幕式があり松尾総長は「モニュメントは決意や取り組みの象徴になる」と語る	10.17 (月)	中日 (朝刊)
4 森島邦博未来材料・システム研究所特任助教らの研究チームは、首都カイク近郊ギザにあるクフ王のピラミッドに隠れた空間が存在することを確認したと発表	10.17 (月) 10.19 (水) 11.15 (火)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊) 読売 朝日 (朝刊)
5 本学発ベンチャー J-ARM は2017年度からアジアでペットの再生医療を支援する事業を始める	10.17 (月)	日経 (朝刊)
6 最年少プロ棋士 (四段) 藤井聡太さん教育学部附属中学校2年生×最年長プロ棋士加藤一二三九段 老いも若きも最善を追求	10.17 (月)	読売
7 OB訪問、ネット調整 本学など12大学向けサービス提供 株式会社ビズリーチ「ビズリーチ・キャンパス」	10.17 (月)	日刊工業
8 愛知県は野依良治本学特別教授、益川敏英同特別教授、小林 誠同特別教授、下村 脩同特別教授、赤崎 勇同特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授、森 重文同特別教授に続き、東京工業大学名誉教授大隅良典氏に「愛知県学術顕彰」を贈ると発表	10.17 (月) 10.18 (火)	日経 (夕刊) 中日 (朝刊)
9 護身術講習会開催：13日 本学の学生や教職員約100人が参加	10.18 (火)	朝日 (朝刊)
10 名古屋鶴舞通信：「聖地」の公園 新たな緑 医学部附属病院が取り上げられる	10.18 (火)	朝日 (朝刊)
11 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生は山本公一環境相らとの懇談会で「パリ協定」に早期承認が急務との認識で一致	10.18 (火)	毎日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
12 寄付金集め 国立大学も力 国からの交付金減額 国立大学への寄付金 本学は28.8億円で6位	10.19 (水)	日経 (朝刊)
13 三菱電機杯毎日甲子園ポウル：名古屋大学対岐阜大学は21対17で本学の勝利	10.19 (水)	毎日 (朝刊)
14 法の日週間記念行事 町田教授のたのしい日本語講座：23日 講師 町田 健文学研究科教授	10.20 (火)	中日 (朝刊)
15 本学などが主催の女性リーダーの活躍を考えるシンポジウム「出産と仕事」開催	10.20 (木)	中日 (朝刊)
16 紙つぶて：2025年問題 株式会社ノリタケカンパニーリミテド会長種村 均氏本学卒業生	10.20 (木)	中日 (夕刊)
17 人材育成、国際交流を推進 日本化学会会長山本 尚本学名誉教授	10.21 (金)	日刊工業
18 名古屋大学レクチャー2016「持続可能な社会への道」—戦後公害の歴史的教訓から—：11月19日 滋賀大学名誉教授宮本憲一氏本学卒業生が講演	10.21 (金) 10.25 (火)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
19 ナビゲーター：「例年以上にお客さんが増えている」と笑顔 トヨタ自動車株式会社会長内山田竹志氏本学卒業生	10.21 (金)	日刊工業
20 叙位叙勲：従四位瑞宝小綬章 飯田 穆本学名誉教授	10.22 (土)	中日 (朝刊)
21 シンポジウム「日本の教育改革における国立大学の役割」開催：24日 松尾総長が多面的な評価による入試の定員比率を35%に引き上げていく計画を説明	10.25 (火)	読売
22 岐路に立つ国立大学→下：財政に「国私格差」共存へ、すみ分け課題 科学技術振興機構理事長濱口道成前総長が「少子化は20年前から進んでいたのに、大学は逆行して800校に増えた。これを無視した今の議論は納得できない」と語る	10.25 (火)	日経 (朝刊)
23 メッセナゴヤ2016：大学生×中小企業＝ユニーク家電 大学生と中小企業がタッグを組む“メッセラボ”の運営責任者の宇治原 徹未来材料・システム研究所教授は「アイデアが1つでも多くかたちとなり、組織の枠を超えて技術を結集させるオープンイノベーションの契機になれば」と語る	10.25 (火)	中部経済
24 朝日新聞「東海経済シンポジウム 2016」開催：24日 福和伸夫減災連携研究センター教授、中村英樹環境学研究所教授がパネルディスカッションに参加	10.25 (火)	朝日 (朝刊)
25 名古屋大学消費生活協同組合は1食あたり10円が基金に寄付される「名古屋大学ベジタブルカレー」を学内の店舗で24日から発売	10.25 (火)	読売
26 名古屋学芸大学学長杉浦康夫本学名誉教授が中日新聞社を訪れ、着任のあいさつをした	10.25 (火)	中日 (朝刊)
27 通学しながら企業で手に職 デュアルシステム 名古屋の2高校導入 寺田盛紀本学名誉教授は「実習内容の調整や指導員の確保などを企業側に任せる場合が多く、負担が大きい」と語る	10.25 (火)	毎日 (朝刊)
28 第42回社会人野球日本選手権：トヨタ自動車メンバー トヨタ自動車株式会社七原優介氏本学卒業生	10.25 (火)	毎日 (朝刊)
29 グローバル時代をひらく：名古屋大学 CIRFE パワー半導体 革新探る ビジョン 天野 浩未来材料・システム研究所教授	10.26 (水)	日経 (朝刊)
30 省エネ半導体 実用研究 国内電力1割減狙う 天野 浩未来材料・システム研究所教授らが窒化ガリウムを使い開発	10.26 (水)	日経 (朝刊)
31 メッセナゴヤ きょう開幕 天野 浩未来材料・システム研究所教授が講演	10.26 (水)	中部経済 中日 (朝刊)
32 逆風下の官製春闘—上：「2%ありき」引けぬ連合 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生は「賃上げの流れは維持したいが、具体的な数字を議論する段階ではない」と語る	10.26 (水)	日経 (朝刊)
33 逆風下の官製春闘—中：対象絞り 苦肉の賃上げ 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生は「若者や子育て世帯、非正規社員への配分を高める方策を進める」と語る	10.27 (木)	日経 (朝刊)
34 進まぬ大災害時の事業継続計画 県内中小企業 策定7.1% 愛知県は本学と協力して講習会を開催	10.28 (金)	中日 (朝刊)
35 オープンカレッジ：地域経済の現状を地図化する 名古屋市立大学講師山田恵里氏本学卒業生	10.28 (金)	中部経済

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
36 2016文化功労者を理化学研究所環境資源科学研究センター長篠崎一雄氏本学元助教授が受章	10.28 (金) 10.29 (土)	毎日 (夕刊) 中日 (夕刊) 読売 中日 (朝刊)
37 笠原竜一郎本学招へい教員らの研究グループは、植物の花粉は受精しなくても種子を大きくできることを発見	10.29 (土) 11. 1 (火)	中日 (朝刊) 日刊工業
38 リケジョ養成 県が乗り出す 三枝麻由美男女共同参画室准教授は「農学部は食品系企業などを旨とする女性が多い。工学部の女性が特に少ないのは、男性中心だった製造、土木現場などで働くイメージが湧かない、食わず嫌いな面がある」と語る	10.29 (土)	中日 (朝刊)
39 一度は訪ねたい! 大学の名建築: 5位 名古屋大学豊田講堂 軒の水平線・細い柱の対比にモダンズム	10.29 (土)	日経 (朝刊)
40 「朝鮮通信使シンポジウム」開催: 11月19日 池内 敏文学研究科教授がパネルディスカッションに参加	10.29 (土)	読売
41 鈴木康弘減災連携研究センター教授が、熊本、鳥取地震踏まえ寄稿 活断層沿い 対策怠るな	10.30 (日)	中日 (朝刊)
42 語る 生前退位: 「象徴」幅広く議論を 神戸女学院大学准教授河西秀哉氏本学博士課程修了	10.30 (日)	読売
43 自動運転の安全性向上 本学とトヨタ自動車株式会社などは、前方の歩行者を90%以上の確率で検出できる技術を開発	10.31 (月)	日経 (朝刊)
44 JST20周年 ノーベル賞受賞者の研究支援 科学技術振興機構理事長濱口道成前総長は「このまま行くと日本は科学技術分野で厳しい状況に追い込まれる。限られた予算の中で、科学技術イノベーションの活力を上げ、経済的な状況を好転させるような機能をJSTで担いたい」と語る	10.31 (月)	日刊工業
45 メッセナゴヤ2016「ミライ製品開発 “メッセラボ”」はプレゼンテーションが行われ、予定管理する腕時計「人工秘書ちゃん」などが発表され宇治原 徹未来材料・システム研究所教授は「学生が持つ力をきちんと社会の力に変え、中部地域を新しいモノづくりのできる地域にできれば」と語る	10.31 (月)	中部経済
46 第53回豊田佐吉翁顕彰祭開催: 30日 豊田章一郎全学同窓会会長は湖西市民に感謝を述べた上で「日本を担い、世界に飛び出していく若者がどんどん出てほしい」と語る	10.31 (月)	日経 (朝刊) 他2社
47 スマイル: 自治体や企業との連携進める 大学と地域の協働をサポート 皇學館大学企画部地域連携推進室書記 梅川紗綾氏本学卒業生	10.31 (月)	中部経済
48 水野正明医学部附属病院病院長教授はプラズマを使って脳腫瘍や卵巣がんを小さくする治療法を開発した	11. 1 (火)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
49 「じゅうろくアジア留学生奨学金」授与式: ベトナムとパキスタン出身の本学留学生2人に対し、奨学金が授与された	11. 1 (火) 11. 8 (火)	中部経済 読売
50 本学発ベンチャーが中心となって設立された地域包括ケアの新拠点「まごころの社」が11月1日に、名古屋市内に開業する	11. 1 (火)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊)
51 社説: JST20周年「おもしろくて役に立つ」研究を支援 青色発光ダイオードなどを基礎から開発まで支援 科学技術振興機構理事長濱口道成前総長は「ノーベル賞案件も最初の成果発表は著名な論文誌でなく、引用は少なめだ。影響力は長期で評価する必要がある」と語る	11. 1 (火)	日刊工業
52 本学主催のシンポジウム「高校・大学・企業がともに考える教育改革と入試改革『高大社接続』の可能性を探る」開催: 12日	11. 1 (火)	中日 (朝刊)
53 ニュース一言: トヨタ自動車株式会社社長内山田竹志氏本学卒業生は「日本には先端研究で先行しているとの安心感があるが、競争が激化しても勝てるのか」と語る	11. 1 (火)	日経 (朝刊)
54 時のおもりのどこまで甘やかすのか 政府と電力会社の癒着 池内 了本学名誉教授	11. 2 (水)	中日 (朝刊)
55 名古屋市立供米田中学校 校区地域防災大会: 福和伸夫減災連携研究センター教授が講演	11. 3 (木)	中日 (朝刊)
56 内田 良教育発達科学研究科准教授は東京都立の高校で、授業中にプールサイドから飛び込んだ男子生徒が、水底で頭を打ち首の骨を折る事故が起きたことについて「授業で教える水泳は本格的な競技ではなく、危険性が潜む飛び込みを教える意義は見いだせない」と語る	11. 3 (木)	読売
57 愛知県医師会健康教育講座開催: 10日 小寺泰弘医学系研究科教授が「胃がんを知ろう 診断から治療まで」をテーマに講演	11. 3 (木)	読売
58 2016秋の叙勲 瑞宝中綬章: 千田純一本学名誉教授、山口勝美同名誉教授	11. 3 (木)	中日 (朝刊) 他5社
59 プロ棋士の藤井聡太さん教育学部附属中学校2年生について日本将棋連盟の指導棋士6段中山則男氏は「彼は10年に1人どころではない逸材。どれだけ強くなるか楽しみだ」と語る	11. 4 (金)	中日 (朝刊)
60 日曜に考える: イノベーションどう起こす 開かれた大学に改革を 企業との連携 組織的に 科学技術振興機構理事長濱口道成前総長	11. 6 (日)	日経 (朝刊)
61 病院の実力: 乳がん 本学の治療実績が取り上げられる	11. 6 (日)	読売
62 鈴木康弘減災連携研究センター教授は自身が呼びかけ、地震を起こす恐れのある活断層を抱える自治体の担当者らが情報交換する「活断層自治体連携会議」が発足したことについて「活断層を巡る防災の実践例や防災の在り方について考える機会にしたい」と語る	11. 7 (月)	毎日 (夕刊)
63 山中宏二環境医学研究所教授は小胞体とミトコンドリアの接触部の崩壊が神経難病 ALS の鍵となることを発見	11. 8 (火)	中日 (朝刊)
64 第11回幸田プレスステージレクチャーズ「世界を照らすLED」開催: 9日 天野 浩未来材料・システム研究所教授が講演	11. 8 (火)	中部経済

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
65 減災連携研究センターと静岡県危機管理部が防災教育や啓発に関する覚書を締結し、福和伸夫同教授は「新しい防災教育・啓発の仕方を開拓していきたい」と語る	11. 8 (火)	中日 (朝刊)
66 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生は2017年春闘について「企業業績は昨年より低い水準になると思うが、複数年でみれば利益は高い水準にある」と語る	11. 8 (火)	毎日 (朝刊) 日刊工業
67 第28回アジア・太平洋賞 特別賞 書籍「福祉のアジア 国際比較から政策構想へ」上村泰裕環境学研究科准教授著	11.10 (木)	毎日 (朝刊)
68 本学が全国で初めて構内に開設した学童保育所ポピンズアフタースクールが取り上げられる	11.10 (木)	読売
69 本学レゴ部が制作した名古屋城などが「レゴランド・ジャパン」をPRするクリスマスイルミネーションで展示される	11.10 (木)	中日 (朝刊)
70 ザ・科学遺産：天文・宇宙編① 全周位傾斜装置 無重力への順応調べる 博物館で常設展示されている	11.10 (木)	中日 (夕刊)
71 紙つづて：三つの判断基準 株式会社ノリタケカンパニーリミテド会長種村 均氏本学卒業生	11.10 (木)	中日 (夕刊)
72 大井貴史トランスフォーマティブ生命分子研究所教授らは医薬品合成の最短ルートを拓くカルボニル化合物にアミンを導入する新反応を開発	11.11 (金)	日刊工業 中日 (朝刊)
73 環境学研究科附属地震火山研究センターと長野県は、御嶽山の麓で火山活動などを観測する研究施設を来年夏に設置する	11.11 (金)	中日 (朝刊) 他2社
74 IoT社会を実現するNEDOのデバイス技術開発：パッド表面計測による半導体基板研磨装置の最適制御技術の研究開発 鈴木教和工学研究科准教授	11.11 (金)	日刊工業
75 石井拓児教育発達科学研究科准教授は私立同朋高等学校市民公開フォーラムの事前学習会で株式会社電通の新入社員が過労自殺した問題を取り上げ、若者の過酷な労働環境を紹介	11.11 (金)	中日 (朝刊)
76 第38回サントリー学芸賞 政治・経済部門 書籍「越境者の政治史」琉球大学教授塩出浩之氏著 (名古屋大学出版会)、社会・風俗部門 書籍「文学熱の時代」熊本県立大学准教授木村 洋氏著 (名古屋大学出版会)	11.11 (金)	中日 (朝刊)
77 国立大学 増やそう女性教員 松尾総長は本学の女性教員比率が17.4%だということについて「このままではいけない」と語り、比率を20年までに20%に増やすことを国連女性機関に公約した	11.12 (土)	日経 (朝刊)
78 名古屋大学・「ウェルビーイング in アジア」・PwC Japan グループ HeForShe セミナー「ダイバーシティと女性のリーダーシップの促進」開催：17日	11.12 (土)	中日 (朝刊)
79 叙位叙勲：従四位瑞宝中綬章 鈴木和博本学名誉教授	11.12 (土)	中日 (朝刊)
80 第35回中学生非行防止ポスターコンクール：名古屋市長賞 伊藤佑里香さん教育学部附属中学校3年生	11.12 (土)	中日 (朝刊)
81 中日新聞を読んで：EU 離脱と英国憲法 愛敬浩二法学研究科教授	11.13 (日)	中日 (朝刊)
82 グローバル愛'S Volume. 28：日本の好きどころ 温かさと礼儀正しさ リム・リーホンさん法学研究科留学生	11.13 (日)	中日 (朝刊)
83 未来社会創造機構モビリティ領域と日本大学生産工学部自動車工学リサーチ・センターは連携強化を目的に協定を締結	11.15 (火)	日刊工業
84 本学、日本大学、同志社大学、米国ミシシッピ州立大学、韓国・全南大学は「先端自動車技術に関する5大学連携国際シンポジウム」を日本大学で開いた	11.15 (火)	日刊工業
85 レーザー：岩尾聡士本学特任教授は「地域でみとる仕組みが必要」と語る	11.15 (火)	日刊工業

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容	
11月25日(金)～12月26日(月) 場 所：中央図書館2階ビブリオサロン 時 間：9:00～21:00 入 場 料：無料	附属図書館医学部分館・大学文書資料室企画展 「戦争と大学 ふたたびー軍医と銃後ー」 内 容：附属図書館医学部分館と大学文書資料室の所蔵史料の中から、軍医と銃後に関わる当時の図書・写真・医療器具等を展示公開する	
[問い合わせ先] 大学文書資料室 052-789-2046		
12月22日(木) 場 所：豊田講堂 時 間：18:00～ 対 象：幼児以上、一般 参 加 費：無料	Campus Concert 演奏曲目：「バラード第1番短調作品23」 (フレデリック・ショパン)、 「くるみ割り人形より (プレトニョフ編)」 (ピョートル・チャイコフスキー)、 「わが祖国より モルダウ (ピアノ連弾版)」 (ベドルジハ・スメタナ)	
[問い合わせ先] 総務部広報渉外課 052-747-6558	出 演：高島美穂氏 (ピアノ)、 天野初菜氏 (ピアノ)	

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月21日(土)

場 所：博物館 3階講義室 (予定)
時 間：13:30~15:00
定 員：15名
対 象：小学3年生以上、一般
(小学生は保護者同伴)
参 加 費：50円 (保険料)

博物館企画展関連ワークショップ
「古代の道具を記録するー石器づくりとスケッチに
挑戦しよう」
講 師：門脇誠二 (博物館講師)



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

1月23日(月)

場 所：ウインクあいち10階会議室(1001)
(名古屋市中村区)
時 間：18:30~20:00
定 員：100名
対 象：一般
参 加 費：無料

国際経済政策研究センター・キタン会
第24回名古屋ビジネスセミナー

講演題目：「我が国航空宇宙産業の現状と展望」
講演者：貞井俊介氏 (三菱重工株式会社名古屋航空宇宙システム
製作所小牧南工場長)



[問い合わせ先]

経済学研究科
附属国際経済政策研究センター
052-789-4945

1月31日(火)~2月25日(土)

場 所：博物館 2階展示室
時 間：10:00~16:00
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

第34回博物館企画展
「誇張なきアートー科学記録にみる美ー第II期」

内 容：動物や植物、人体などの教育・研究を通して名古屋大学に残された貴重な記録を紹介ー精密な描写技術がアートを感じさせます



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

表紙サークル紹介



表紙
OB 会とのコンペ
(ゴルフ部)
(平成28年11月11日)

ゴルフ部

私たちゴルフ部は、平日は学校の練習場、休日は豊田市にある笹戸カントリークラブにて練習を行っています。ほとんどの部員はクラブも握ったことのない初心者からのスタートですが、経験者や上級生の指導の下で彼らとともに練習に励み、ショットの精度とスコアの向上を目指しています。ゴルフは個人の競技と思われがちですが、複数人のスコアの合計を競う団体戦もあり、チームとして強くなる必要があります。現在の目標は、団体は七大戦優勝と一部昇格、個人では各大会での上位入賞です。これらの目標を達成するため、日々の練習に加えて、夏休みと春休みにそれぞれ2回ずつ合宿も行っています。

名大トピックス No.283 平成28年12月15日発行

編集・発行/名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、受賞の掲載、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601) TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ (<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/publication/index.html>) でもご覧いただけます。

176 名帝大附属医学専門部 — 戦時下の軍医養成 —

1937(昭和12)年7月に盧溝橋事件が勃発し、日中全面戦争に発展すると、軍医として召集される医師が増え、国内の医師不足が問題となりました。

そこで1939年5月15日の勅令により、軍医を中心とする医師の急速な養成を目的として、内地の7帝国大学及び6官立医科大学に設置されたのが臨時附属医学専門部です。入学資格は中学校卒業者などとされ、本来であれば卒業後、高等学校3年・大学4年の7年で医師となることを、専門部の僅か4年で速成されました。医師であったことが知られている漫画家の手塚治虫も、大阪帝国大学附属医学専門部の卒業でした。

創立されたばかりの名古屋帝国大学(名帝大)にも、臨時附属医学専門部(以下、専門部と略)が設置されました。組織の長である主事(のち部長)は田村春吉医学部長が兼任しています。初年度の入学試験には、定員80名のところ506名の志願者が殺到しました。82名の合格者の8割が東

海4県出身者です。

専門部は、当初は鶴舞の医学部の講義室を使用していましたが、1940年度からは新営された専用校舎も使うようになりました。臨床実習などは医学部との施設の共用が難しく、名古屋市内の病院で急場をしのぎましたが、やがて43年に医学部附属医院分室(44年に分院)が設置されると、そこを専用の診療病院としました。

授業は、当初は医学部の講師等が兼任で行いましたが、1940年からは専任の教官を置けるようになり、しだいに増員されて、45年6月には専任教官の定員が教授14名、助教授6名、助手10名まで増やされました。なお、44年4月には名称から「臨時」を削除して、「附属医学専門部」となりました。

終戦後、専門部はその役割を終え、1946年度から新規学生募集を停止し、49年に新制名古屋大学に包括されたのち、50年に廃止となりました。



1	2	3
4	5	

- 1, 2 名古屋帝国大学臨時附属医学専門部の授業風景
- 3 医学専門部生徒と陸軍将兵。軍隊での体験実習の時のもの。
- 4 名古屋帝国大学医学徒報国隊無医村診療班として活動中の医学専門部生徒。
- 5 1943年に名古屋帝国大学に寄附された陸田ビル(現在の中区栄4丁目、写真は1926年当時)。ここが医学部附属医院分院として、医学専門部の診療病院となった。